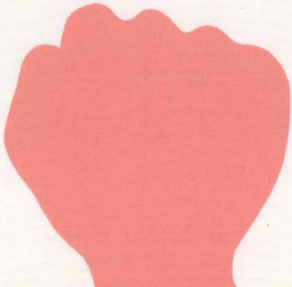
おじいさんの手

菅龍一

太郎次郎社

おじいさ

菅 龍一



おじいさんの手

一九八六年八月十五日初版印刷　一九八六年八月二十五日初版発行

●著者
菅龍一

●さし絵
鈴木恵子

●装丁者
小林敏也（山猫あとり系）

●発行者
浅川満

●発行所
株式会社太郎次郎社
東京都文京区本郷五-二二-一七　郵便番号一一三
電話〇三-八一五-〇六〇五（代）　振替＝東京五-一三七八四五

●印刷所
壮光舎印刷株式会社・福音印刷株式会社

●製本所
武徳社

●定価
カバーに表示してあります。

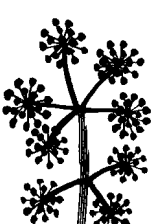
8393-2401-4456　©1986

菅龍一……すがりゅういち
一九三三年生まれ。
一九五七年、京都大学理学部物理学科卒業。
現在、定時制高校教諭、大学非常勤講師、教育相談委員。
岸田戯曲賞、サンケイ児童出版文化賞受賞。
著書に『教育の原型を求めて』（朝日新聞社）、『子どもの心が見えるとき』（柏書房）、『親とたたかう』（筑摩書房）、『善財童子ものがたり』（偕成社）など多数。

◉おじいさんの手　菅龍一

◉目次

1 闇のなかで、わたしを呼ぶ声——6
2 善さんの孫かいや——25
3 冬から春へ——41
4 売れ残ったうど——57
5 うど小屋の壁に刻まれた文字——73
6 梅雨の晴れ間に——89
7 日本海の白い波——105
8 村人たちとの対立——122



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

9 おじいさんをたずねて——142
10 多摩の森の療養所——161
11 寺谷の秋——178
12 瀬戸内海の島——196
解説にかえて　島比呂志——226

本文さし絵◉鈴木恵子
目次・見出しカット◉小林敏也

◉おじいさんの手　　青龍一

1　闇のなかで、わたしを呼ぶ声

音と匂いがわたしを変えた

パチパチと柴の燃える音に、香織は目をさました。ゆうべから本格的に降りはじめた雪が、屋根をすべり落ち、地響きをたてる。身体がブルンとふるえ、肩が冷えているのがわかる。香織は重い掛けぶとんを引きあげ、そのなかに顔をうずめた。

毎朝、おばあさんがかまどでごはんを炊く柴のはぜる音と、煙の匂いが、香織は好きだった。いまでは、けさ、おばあさんが燃やしているのは、杉っ葉か、しいの葉か、それともくぬぎの小枝かが、その音と匂いでわかるようになった。

「けさの音は勢いがいいし、煙は香ばしいから、くぬぎの小枝だ」

台所から、障子ごしに流れてくる匂いをかごうと、香織はもぐりこんだふとんのなかから顔を半

分だし、小鼻をヒクヒクさせた。

ドドーンと、また雪ずりの音がして、地響きとともに家がゆれる。しかし香織は、少しも怖いと思わなかった。半年ほどまえまでは、どんなに小さな地響きでも恐ろしかったし、あらゆる物音におびえていた。それが、いまでは嘘のように落ちついていられる。香織には不思議だった。自分は変わったと思う。

バチバチと線香花火を何十本も一度に燃やすような音がした。香織は、おばあさんがごはんの火を落とすまえに、杉っ葉をくべて火の勢いを強くしているのがわかった。そういえば、ごはんが少しこげてきたいい香りがただよっている。杉っ葉とごはんの匂いにつつまれて、香織はまぶたを閉じ、いまの自分はしあわせだと感じていた。

去年の春まで、香織は神奈川県の川崎という工業都市に、お母さんと二人で住んでいた。多摩川の土手に近い、古い市営アパートだった。朝になると、近くをとおる第二国道のトラックや乗用車のけたたましいクラクションと地響きに、香織はきまって目をさました。朝の交通渋滞に巻きこまれていらいらしたトラックが、乗用車をおびやかすように大きな警笛を鳴らす。乗用車は乗用車で、少しでもあいた車線に割りこもうとし、おたがいにけんせいしあって、悲鳴をあげる。三日に一回ぐらいは、ドカーンという大きな音がし、やがてパトカーや救急車のサイレンが聞こえるのだった。

香織の一日は、おびえた目ざめとともに始まるといってよかった。

国道の渋滞が激しくなると、クラクションとともに、車の排気ガスの匂いが、香織の寝ている部屋にも侵入してくる。それに混ざって、お母さんが台所でごはんをたき、みそ汁をわかす都市ガスの匂いも流れてくる。香織は、どちらの匂いもいやだった。息がつまり、身体も心もしぼんでいくような匂いだった。

「そうだ。あのころと、わたしのまわりの音も匂いもちがうんだわ。それが、わたしを変えたんだわ」

と、香織は納得した。そして、もう一度、小鼻をヒクヒクさせて、杉っ葉とごはんのこげる匂いを、胸のなかに吸いこんだのだった。

関東地方の去年の冬は、とくべつ寒かった。川崎市にも何回か雪が降り、すすけた道路の雪がいつまでもとけなかった。市営アパートの古い住人である隣のおばさんは、こんな冬はここに住んで以来はじめてのことだと、お母さんに話していた。

何度目かの積雪の朝、香織は市営アパートから国道にでる道で、乗用車にはねられ、気を失った。雪のため、車のブレーキがきかなかったのだろう。さいわい、香織のけがはたいしたことはなく、検査のため、二日、入院して帰ってきた。だが、それから、団地の外にでられなくなってしまった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

国道に通じているあの道路までくると、足がすくんで動けなくなるのだった。
二月、三月と香織は小学校を休んだ。四年生から五年生に進級することはできたのだが、四月になっても学校へ行けなかった。困ったお母さんは、五月の連休を利用して、生まれ故郷の山陰の町の、この部落に香織を連れてきたのだった。
お母さんが何のために自分を連れてきたのか、香織にはよくわかっていた。だから、おばあさんが、
「こがいな五月に香織ちゃんを連れてきて、どがいしただいや。いつもは、夏休みにくるだないか」
といい、お母さんが返事をしかねているのを見ると、香織は自分でいいだしたのだった。
「わたし、おばあちゃんと、ここに住みたいんだけど、いけないかしら」
おばあさんは目を丸くし、お母さんは涙をためてうつむいていた。その沈黙がつらくて、香織はさらにつづけた。
「わたし、川崎で登校拒否になったの。都会はいやなの。ここにおいてもらっていいでしょう。わたしが学校へ行けないと、お母さんは心配で、お勤めにいけないのよ」
あいかわらずうつむいているお母さんと、たたみこむようにしゃべる香織を見くらべて、おばあさんがため息まじりにつぶやいた。

「なんだいや、こりゃ……。どっちが親だいや。どっちが子だいや」
そのことばの裏に、たった一人の孫である自分と住むことを喜んでくれているおばあさんの気持ちを、香織は感じた。そして、一人になる母のさびしさも考えた。
（しかたないじゃん。これしきゃないよ）
と、香織は思った。

うど小屋の明かり

一年まえのことを思いだしながら、香織はまどろんでいたらしい。おばあさんが、ごはんをおひつに移したのだろう。香ばしいおこげの匂いがたちこめている。みそ汁もできたようだ。大根と自家製のみその匂いが流れこむ。
「おかまの底に、きつね色のおこげが、うっすらとできとろうがな。これが、うみゃあ（おいしい）ごはんをたくこつだで。電気だあ、こうはいかんだわいや」
いつか、おばあさんがおひつにごはんを移しながらいったが、香織は「ほんとうに、そうだ」と思った。電気釜のカタカタと鳴る音もきらいだったし、アルミの釜の底にくっついたベチャベチャ

と水っぽいごはんつぶの匂いもいやだった。きつね色のおこげを、おひつのなかのごはんのいちばん上に、ふわっと広げて敷きつめると、おばあさんはいつも満足そうにそれをながめる。いつか、

「このおこげが、おじいさんは好きでなあ。たきあがったごはんの、この色のええところを、こうしてふっくらと盛りあげて茶わんによそうと、うれしそうに食べんさった」

といって、香織のお茶わんに盛ってくれたことがあった。

「おじいさんって、どんな人だったの。どうして、早く亡くなったの」

お母さんは、おじいさんのことを「わたしが生まれると、まもなく死んだ」といっただけで、くわしく教えてくれなかった。それで、香織はおばあさんに聞いてみたのだが、なぜかおばあさんも口ごもって、

「戦争でのう。遠い戦地で……、死にんさっただわいや」

と答えただけだった。

香織はお父さんも、おじいさんも知らない。お母さんにいわせると、お父さんもまた「香織が生まれると、まもなく死んだ」そうだ。親子二代にわたって、どうして父親と縁がないのだろうと、悲しく思うときがある。でも、そんな気持ちは、お母さんにうちあけられない。お母さん自身が、そのことを気にしていることがわかるからだ。「遠い戦地で……、死にんさった」と、おばあさんが口ごもったときも、おばあさんの気持ちを察して、これからは、おじいさんやお父さんのことは

口にすまいと、香織は決心したのだった。

キーッと、たてつけの悪い裏の戸が開く音がした。こんな雪の朝に、おばあさんは何の用事があって外にでるのだろう。すっかり目がさめた香織は、着がえをして、台所に行ってみた。思ったとおり、ごはんはおひつに移されていたし、煮あがったみそ汁が、おき火の余熱で静かに湯気をたてている。そのとき、カチャンという音が聞こえた。

「おばあさんが、うど小屋の鍵をあけたんだわ」

うど小屋とは、春の朝市でおばあさんが売る名物のうどを栽培する小屋である。古い小屋だのに、いつも大きな南京錠がかかっていて、まえから香織は不思議に思っていた。

香織は土間に降り、裏の戸を細目にあけて外をのぞいた。きのうまでの冬枯れた谷が、一面の銀世界だった。新雪の上に、朝やけのピンクの光がさしている。一〇メートルほどはなれた小川ぞいのうど小屋のまえに、おばあさんがたち、小屋の戸をあけていた。足もとには、お盆がおいてある。遠目でよく見えないが、お盆からは湯気がたっている。どうもお茶わんとおわんが乗っているらしい。すると、ごはんとみそ汁がいれてあるのか。おばあさんは、いったいなにを考え、なにをしようとしているのだろう。

おばあさんは、戸をあけると、お盆を持ってなかへはいった。戸が閉まる。やがて、うど小屋の

小窓から明かりがもれた。小屋には電線がはいってないから、ろうそくか石油ランプをともしたにちがいない。ズズーンという音とともに、また屋根の雪が落ちて、香織の視界をさえぎる。粉雪が戸のすき間から舞いこむ。寒さに身体がふるえて、香織は土間から台所にあがり、かまどのおき火に手をかざした。

カチンと大型の南京錠を閉める音がし、やがて、お盆をさげたおばあさんが帰ってきた。

「うど小屋に、なにをしに行ってたの」

香織がたずねても、おばあさんは答えない。朝ごはんをたべるとき、香織はおやっと思った。おひつのごはんの上に、ふっくらと広がっているきつね色のおこげの、そのまんなかのいちばん色のいい部分がなくなっていたのだ。

紀子さんの成人式

「はよう、ごはんを食べにゃ。学校におくれるだど」

おばあさんのことばに、香織は笑いだした。

「きのう、いったでしょう。きょうは成人の日だって。学校は休みだって」

「聖人の日やて。法然上人か親鸞上人の命日かいや。それで、学校が休みになるだかいや」
香織は笑いころげて、お茶わんを落としそうになった。
「ほら、みかちゃんちの紀子お姉さんが、きょうの晴れ着だといって、いつか見せにきたでしょう。それを着る日じゃん」
「そうやった。町の公民館で式があるんやった。わしも、はい、ボケてしもうたわいや」
と、おばあさんがやっと笑った。うど小屋にはいったのを見とがめられてから、おばあさんはずっとふきげんな顔をしていたのだった。
朝食が終わると、みか子が、
「香織ちゃん。うちにきんさい。ばあばんもいっしょにな」
と、まるで、ころあいを見はからったように迎えにきた。みか子は香織より一年年下の四年生。紀子さんは町の高校をでて役場の戸籍係に勤めるOLだ。
「おばあちゃん。行こうよ」
「わしは、あとかたづけがあるだけえ、香織はさきに行きんさい」
「いいの、さきに行っても」
香織はワインカラーのブーツをはき、みか子を追って外にでた。去年、川崎で二度目の大雪が降ったとき、お母さんに川崎駅まえのデパートで買ってもらったお気にいりのブーツだ。ちょっとお

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com